



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市社会学 : 昭和28年度特殊講義案 第7巻
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	東洋大学社会学部大学院社会学研究科講義案。都市の近代化と都市の分類。
Issue Date	1953
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77390
Type	manuscript
File Information	N014_01S28.pdf



NOTE BOOK

Made of paper
Specially selected at your demand

都市社会学

二十八年
特 殊 講 義 案
第七卷

都市の近代化と都市の分類

AY
A6



本一、二の両方
が五五五

都市の近代化と都市の分類

一、系属としての史的発展

二、都市の史的発展と近代化

三、近代化の方向

四、近代化による都市の分類

五、従来の都市の分類

一、経済学的都市分類

1
二、高松北方の歴史的發展

人類の古い歴史を顧みるとその下に經過され
た高松地方の型の推移を大きく分けて
二期へと次の様に分けるのである。

第一時代、血縁が最も強い部族の結合の

紐帯で、血縁図が移動的或は半

移動的の生活を中心とする時代。狩猟、

狩獵、牧、漁撈の時代である。

第二時代、農耕を始めて土地に定着し

村落をなす時代。村落結合は

第一、血縁は近代紐帯として有力であ

るが、次に地縁が有力となり、終つて

血縁を駆逐せしめて地区集團が

代打役になるの基本的な結構となる。

第三時代——村落になるが相當に発達した

村落都市となり新しい集落になる

発展し村落と平行して発展して来

た。此都市は集落になる祖型として

村落なるもので、地区集團を形成す

るようによつて発展しやうとした。

都市が、発展したの人は交易を必要

としそれを制約化しなければならぬ

要を感じ始めたころと政治的武力的

活動が、征伐や統治の爲の便法な足場

といふ都市を利便し始めよう。

明治時代——従来都市は住居の密集地であつて、職場の活動も住居内で行つて居たが、産業革命と共に大なる労働者が都市に起りおらしい大なる労働者の多量な都市の住居の間に割り込んで来た時代。こゝでは地盤を掘り通して職場の線が新形式の都市に於ける最も強力な経済的要素となつた。

明治時代——これは予想され、未だの都市である。そこは今日の様に居住の

守山集地は、はななく、するま、即ち職地の集
合地である。住居は都市の外部に主
として職地の縁によつて作られ、村を
なすて、あうう。かくの如き村は、都市を
とりまく外周に多量に出来て来る。都市
の内部は、^部職地は、オフィス街（官公庁、
銀行、金店、銀行、金店）商店
街（デパート、専門店）工場街（動力
に電力を用ゐるもの）に区別される。
多くの工場は都市の外周の村に
分散し、又石炭を動力に用ゐる工場
は更に外周にあり、停車場の附近に

群

工員住宅と共に移転す。病院は
甲市内の各地に大に巡遊流布する様に
あらへんなく配望せられ。

右の五時代の成り四時代は過去に
過し来たす実心あり五時代はその
実心もとつて將來をすしと思は
れり方向である。

十八世紀後半（一七六〇年以降）多量の幕府
より十九世紀初めまで幕府の支配と共
都府人への多量の幕府の支配と共
代の上の幕府の支配と共
幕府の上の幕府の支配と共

2. 都市の発展と近代化

都部に夏落合こへ芳工に求へん好

石路
過
を
山
て
来
を
思
ふ
、
その
所

近代の政治

近
 庚
 す
 小
 過
 程
 と
 云
 わ
 る
 不
 外
 事
 也
 〇
 予
 外
 也

は貝谷の心居住要港としての都市に

戦場から
窮乏の
四ノ
事
を
意味する。

居屋集
卷之
二の
都市は
地は
集
園

う整
帯によつて
死
産して
居る
もの
ある
か

新、レ、
戦場の
基盤
の上に
成した
戦

城集團の増徴は漸次地回集團に

驅子
し
清
渡
せ
し
め
る
所
に
現
在
と
い

これ大都市はかくわけ、北能に在る。
それ、都市発展の第四時代の模範に
あつた。

都市の近代化の進展の程度は都市
毎に異なつて居る。日本の現在多くの都
市は大部分中世の城下町であつたが、
尚ほ整備した地区集團を異なつて居る
ところか少くはない。それ等の都市には
都市の巨大な工業地帯、（これは多く）
都市人の総数の中
に、都市の巨工や労働者に居る人にかゝる
何パーセントかにあつた時は在来の地区集

2. 同様の措置は解消するものがある
3. それをパーセントであるか未だ明か

新島の巨工の製作をなすものは主として、
工学、運輸、土木、建築、である。

形勢の事業と云ふは其の
に位置をより分離し、その事業の基礎

ク上ハ各族の集團又ハ構成され地又集團

五
驅ふん
足ふん
文の集
國活
か
良
は
て

片
その
或
程
上

12
規
模
が
大
き
い
か
ら
あ
の
お
と
す

その税以下へは
要作に於ては

明治以前の家内工業時代の従来の
職分と田舎の序なり。それは産業革命
以前の職分であるには過酷的な慣習が
義理の原則を乱用し封建的秩序の中に
定まり他人の自由を奪うを奨励するが故
に。如き上下の秩序はその記号を保持し
てから如き上下の秩序に対して自由
平等の旗をかかげて現われたいが新舊の職
分の記号である。そこには義いと善い自然
権利が記号される。労働関係はかく如き
階級の職分にあるに先かよりうである。
労働と関係が企業を対して対する。

より、女系よりには男御を仰に於けり或は親政
の職人よりかはあやう。故に幾やうも代
に於ては男系は従来の服従を強められ
権柄の元法を定むるに於て近代化され
職に於ては男系は命令か、これ等の職
に於ては男御基準法を令く多力である。
凡そ従ふ總裁か何人以上に達して時
の職は近代化されるか。これ大層問題
である。男御元法は凡そ従ふ多何人
以上の職は近代化的職に上りて女系
か。

二十に於ては男系は男御命令か形成され

尺よのは終るゝ人以上の職か。労働
 組合が活躍し活知して尺よのは何人以上か
 ストライキに及した組織あるは何人以上
 の職か。先づの医療施設を待つて尺よの
 は何人以上の職か。これ等の先か是つ答へ
 小ぢ小ぢはなれぬ。余が若干の都市について
 調査したところによれば凡そ 人以上の従
 事者の職か近代の機械の職かといふ
 事がある。概してある。

都市に於いては、家族の人口が四人とすれば、その
都市内の人口以上の労働力を必要とする。総取
か、その都市人口の総数の殆どは、その（さ）し

したが、近代化の息吹の下にある人々は
その都市人の弱半表である。と云ふことになる。
その都市への弱半表が近代化の息吹を
受ける。たゞしくその都市は全般的に近代
化で地味集（田舎）を消して行くであらう。
弱半表を必要とするか三分一にしてその都市
は近代化して行くか、多くの調査の結果より推
定されなければならない。

一宗に不審がある。七時援助するのは地味集
の人か職人の人か親族かといふ所見に
は符合へた結果が、都市化の程度を推
定するにあつた。市のケツインズアーによつて

こ
い

余は、
誠、
心を
調、
空、
の
境、
果、
は
り、
表、
の
所、
つ、
ま、
る

當時に於ては中世より近世への移行は
都市政体より口民政体への移行であつ
た。市民権の概念を定むる。分井 昭
然し日本では都市政体の時代はな
く市民権の獲得も同時代に成つた。
明治維新は都市に於いては藩政より
口民政治への移行であつた。

即ち明治の時代は中央の威光を失ふた
地方都市は地方豪族の保護の下に
あり、^{地方豪族は}地方豪族は口民中央
の支配の保護を以て都市は存在し
た。つまりこの時代である。

3. 近代化の方向

近代文明の方向は他人と无自由を尊
重し^{モカ}他人を拘束する一切の西郷儀より

他人を解放せしめやうとし、其の
には勇敢に合戦を致し、^是是の傳統

を断ち切り、^是是の「中央」の中に於て

この道義や感情を排除し、冷徹な

契約的関係のみを以て^{都市に}同様に認めやう

とする。これが近代人の生活態度であつた。

かくの如き生活態度の近代人は封建的身

分を捨て、^{更に}更に家族を捨て、^{更に}更に家や

同族の古い拘束より脱かれ、^{更に}更に地縁的

物より解放され、各地に集團の色を

の形に、を放棄してしまつた。^{今や}天涯に自

由を欲する。彼は亦や宗族の最小型に

ある夫婦宗族と十市、の政治体としての

治安の必要と必要と見られる。一宗と民

二つの集團以外には彼に拘束するものは

ない筈であつたが、彼及び彼の友人等は

甚だしく拘束の多い職域に於て自分を以

てけりしものはたゞ知らぬ。自由を主張し

平素を理想とする近代人が、^{（この）}最も拘束の強

い最も上下的地位に拘束され、その職

場に対するつけよれ、それは近代都市

⑥
大々たる陸揚では

何千何万の人が一受ん事あり、大きなアハ

には何千何万の人が一様の下に居し、大百億と

然んは何ん何万の人群を出入し、

何千何万の人を運ぶ船船あり、

の第一の矛盾である。第二の矛盾は

他人を其自由を尊重する近代都市

における機械の進歩と共に大量生産

と常に大量消費が行はれ、
(東洋は異なり)

ゆえに巨大な人群が運搬せられ、
(受ける側の)

も人群が便溺をせざるを得ず、
(受ける側の)

ある故に、
ある程度の巨大な人群である

巨大生活の中心に他人の興味を惹き、
注意

他人は巨大運行に黙然と追従す
(たいてい)

はかりである。他人の行動を支配する
す。

機械は他人の巨大群の人々を動かす

に動かし、他人の停止はゆゑなく、

そこで他人は皆機械となり、
なりなればよい。

他人を尊敬した

近代大都市の生活は巨大生活である。

それは近代都市の第一の矛盾である。

第一の矛盾は第一の矛盾と第二の矛盾の

合作から生じた矛盾である。本

(や他人の人権擁護)

来他人の北分は地位向上のみに生じた労働

組合運動は階級的運動であり階級

意識として中央集権的統制的である。すなわち

階級は他人の不幸を幸福にするもの

故に

(や他人の感情)

作の目的を達成し知となつて行く。近代

の規範を達成するものは

都市は職分を専らにすることである

が、職分の本質を結合して成る都市の各職分

都市内の各職分

労働組合が聯合し都市内の全職分を聯

(結合して作る)

合して形成してその聯合体はその都市の

(心)

④ 45に

階級闘争の闘士は一切の物に己の力

のを犠牲にして階級に奉仕し階級の為

戦つて居る。

となす。

の所は、島根大の集団組織である。此国本

集団の近き方向は都市化の所

4. 2. 1. 方面の所である。

して戦つて

氏臣大なる集団の為に我々自身

多量の武士の生れは、我々は常にその

治部は完全な服従である。

小島を配りたる中世封建時代の武士の

能くもに比す可いである。個人主義自由

主義の原則の上に我々近代の職

の存在の矛盾である。

2. 1. の矛盾は自由をねがふに在りて

集団より解放された近代人が最も

都市

物事の多い近代的職場に参入して居

る。

その矛盾は個人主義自由主義を
究極の目的として成長させて来た近代都
市は至巨大大生活の中に個人を自由
を享受して居る。

その矛盾は個人生活の擁護の爲に
是れ大衆協同運動は個人生活
を犠牲にして居る。競争形式
競争として現れ居る。

右の三つの矛盾は明らかな矛盾であるが、
隠れた矛盾の極である。此三つの矛盾

を一つにして考へるとどんなふうになるか。
近代化が進むにつれ、他人を我自由を我
の自由は愈々高くなるか、それは富強佛
に於て、他人は愈々職分を必要とし
職分の拘束は愈々少くなる。又都市の
巨大生活は愈々大規模になり、他人は愈
々機械化された生活をしなければならなくな
る。階級闘争は愈々少くなるか、
その闘争も職場の跋扈や巨大生活の
増大を伴ふ定数ではなく、財の分配や
人の配分により形式を考へてみる
過ぎない。政に都市そのものの発展

方向を修めしやうとするのではない。細くは
都市を愈々職場の中へとなし巨大生活
にその特色を帯びしは近代化の方向は依
然として存続して行くよと思はれる。

4. 近代化による都市の分類

早しく都市と云つても前近代的都市
と近代的都市とは其性格、大著しく異
つて居る。これを区別する。は概念の
整理、爲にも是の施策の爲にも必要
なつてゐる。前近代的都市と近代的都市
の相異は都市の村境の相異に匹敵
す。相異であるからである。

然るに前近代的都市と近代的都市の相
異は云々といふ何ぞよと云ふ存するであらうか。
私は両之の相異を云々して法の臨むた
見出しで居る。

前近代的都市

一 地区集団の整定

一 巨大職域の未発達

一 家内工業の工業

一 労働組合の未発達

一 家族的生活

一 直系家族

一 半世帯強くなれ

近代的都市

一 地区集団の解消

一 巨大職域集団の整定

一 大工場工業

一 労働組合が主たる都市人口の大部分以上

一 巨大生活

一 夫婦家族

一 半世帯多し

前近代の都^(市)と近代の都^(市)の相異は、たと

えば、如き諸点にあると思はれるが、近代

的都市たるには或る程度の人に規模が

自から必要であらう。都市の人の大か小を

より直接に都市の近代的と近代的と

区別つけし要素^{には}なり得る。巨大職

域^の存在のため、或る程度の人に

は必要である。然し人に量が必要に大なる。

都市^{には}より前近代の都市はあり。

都市の近代化に必要力量を必要とするは

巨大職域^の存在である。即ち巨大職

域^が近代化の性格を打つてゐるのは

労働組合の活動により自由な組合主義
が成立し、促進されるべきである。

然るに都市の近代化を最も促進し、そのは
労働組合のありを知らなければならぬ。

古い時代より人の団結力を保持したのは都市に上層
階級地位の人々であった。王侯の一族、武士、地主、
宗族、知り。下層階級地位の人々は常に

結束するが、出来なかった。それ故に、出来たのは

資本主義階級の発展と共に大規模な出来

労働者が皆身近に相寄り相集まること

労働組合を形成した時である。人間関係のあり

かへして大衆形成の機軸である。

と 従来の都市の分類

従来の分類は大体次の四種に属して居る。

- 一、人口規模別分類
 - 二、機能別或は職能別分類
 - 三、形態別分類
 - 四、工業別分類
- 人口規模別分類は例へば次の如きものである。

人口

—5,000—10,000—20,000—50,000—100,000—100,000—1,000,000—

田舎村	地方町	小都市	中都市	大都市	巨都市
-----	-----	-----	-----	-----	-----

(木内柳市地理学 p. 271)

其能分れは例へば、
吟の如きものか。

- 一、工業部
一、地方工業部
一、農林部
一、水産部
一、建設部
一、衛生部
一、警察部
一、文庫部

市
内
同
上
p. 262
-3

其外產部及馬高工部。工業部。

銃 砲 市 場 を 分 割 す の よ
(土井 爲 士)
中 型
工 型

高型文通型公孫型平地型
分付ノ考へ

(内田工學士) 也。

合上
P. 259

形態の分れは、例へば次の如き分れである。

- 一、要素の形
- 二、集居の形
- 三、ヒートン形
- 四、街林の式
- 五、不規則形

(木内氏 p.258)

丁史的分れは、例へば城下町、砦町、

高草町(宿坊、市場、港)の分れである。

木内氏は

一、封建の基礎に立す、その発展の顕著

なるもの

二、封建の基礎を對し、主要なものは
相對的に発展の鈍化したもの

三、明治以降の発展したもの

右の分れが、可能であるといふことである。

（おめは
p.257）

凡そ分札は検査制度の年額として必要
であるが、それと水の検査の金額を
分札の存するものはある。検査は
都市を今社会的統一体として認められ
るとして分札してやるものである。都
市の分札に於いては検査は都市の
社会的性格を整理化するに
必要である。検査は都市の
社会的性格を整理するに必要である。
検査は都市の社会的性格である。検査は都市の社会的性格である。

また二割増である。尤も之の懸念を以て
しあるが、多くの近代工業は競争を以ての
都市の上にも立^地するものであるから
事實
に對しては、近郊は容易にはなつて、
然し大企業体は之として工業に伴ふよう
であるが、近代工業の発展に伴ふ
五ヶ文、其の都市は近代化して行くとい
はれ、こゝでも競争の激化の程を以て
其都市の向はである。

都市景観区分

都市の景観を構成する建築物は

次の各様である。

一、住宅

(独立住宅、長屋、客の宿舎、アパート)

二、職場建築物

(工場、役所、学校、デパート)

三、公共建築物

(商店、銀行、官公署)

イ、娯楽

娯楽、休息場のためのもの(公園、グラウンド、競馬場、球場、釣堀)

ロ、交通

交通ののためのもの(鉄道、電車、橋、地下道)

ハ、教育

教育、研究、文化の場(学校、私立、公立、図書館、博物館、公会堂)

病院

都市を分れ

才一 旧来都市

才二 新興都市

——
時代分れ

A

住居都市

——
機能分れ

B

職場都市

組合を分れ

才一 旧来都市

——
A 住居都市
B 職場都市

才二 新興都市

——
A 住居都市
B 職場都市

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

都市の中心部には豊中市も含まれる。これは住民の職業から見て、その中心部は中心部である。

はるるをみる。此の世は一般に大正時代の
存在の形によつて知られよ。

またその新と云ふより必要なり。斯くの

へ、いふか、然しそれは果してこれ大正の生活

的意義をもつて、今この時代の生活は人の

生活の活動は工業であらうと云ふのである。

うろと、いふは此の時代の生活は工業であらうと云ふのである。

まして、大正の生活は工業であらうと云ふのである。

であらうと云ふのは、大正の生活は工業であらうと云ふのである。

金銭の生活は工業であらうと云ふのである。

である。此の生活は工業であらうと云ふのである。

を云ふ。大正の生活は工業であらうと云ふのである。

はるる。大正の生活は工業であらうと云ふのである。

生活の生活は工業であらうと云ふのである。

人々の生活は工業であらうと云ふのである。

大正の生活は工業であらうと云ふのである。

大正の生活は工業であらうと云ふのである。

大正の生活は工業であらうと云ふのである。

大正の生活は工業であらうと云ふのである。

大正の生活は工業であらうと云ふのである。

大正の生活は工業であらうと云ふのである。

大正の生活は工業であらうと云ふのである。

人と人との結合。同様の現象
史の上で

△階層の結合。階層としての存在を意
識し、互に他を以ては政治的におけよ
是れも大方な特色を以てしめられよ
とある。

から政治学の同位である。

私は今述べるその立場より、最も重要
なるべき都市分れの根拠を考へてみる。
人種、歴史、文化、政治を以て考へると
人と人との結合、同位を中心としてし

階層の同位は政治的人同位である。我
は最も大方な同位と考へられよ。然し

は都市の分れにおいて我は是の様に

語らうとしてゐる。最も根拠ある

と考へる。然し、はたして都市並みの都市

と大いなる存在の都市心との区別

即ち都市の分れの根拠を都市人にと

の中心に置き、これを以て分れとな

げられたいと思ふ。

例へば、百人以上の経済的集積のある都市

（政治的の中心）といふことは

依

その節に於て、
總の金に於て

二 終 徒 爲 其 の 爲 に 一 其 の 即 ち の 人

12の十以上の
一の位は4
ある。

を
即ち
私の
基準
とする

卷之六

石人

上と云ふ子にも又

全市人口の十 $\frac{2}{5}$ の一と五 $\frac{2}{5}$ にも及ぶ

電
あまの
ありふり
あるか
今それ

降す余福はなし
百人以上ある

總的方針
階級的團結
加強成土也
十五分

の（一）は、本市の生活に親和的

た
ろ
ろ
ろ
ろ
ろ
ろ
ろ
ろ
ろ
ろ

私の
手紙によつて
近代都市と
近代都市の

各乳が意味を
たれと片とを
へるよのてあ

か、右の如き煩瑣な分限は分限として
好ましいとはいはない。分限の二つの原形は

同時に取扱ひを要するところである。

右の分限は近代化の促進を要するとして
も即してかくの如き近代化が都市を区別
する。最も大きな標準はちがわぬとして
都市の近代化を足分たしとて手近かな
分限はなすところである。

才九章よ

都市の経済的統一略

才十章よ
都市の近代化と都市の発展

才十一章よ
都市の経済的統一略

才一章上

都市の社会を研究する序説

才二章

都市の社会の概念

（一）才二章才九節六項考略

才三章

都市と村落の別

才四章

都市の社会構造

才五章

都市の外部的社会構造

才六章

都市の諸集團

才七章

都市の社会関係

才八章

都市の社会（一）階層、階級